
欺瞞に満ちた世界

とっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欺瞞に満ちた世界

【Nコード】

N8714D

【作者名】

とつち

【あらすじ】

裏切りや嘘、俺の世界は欺瞞に満ちている。裏切り、嘘、非現実な物語。数々の謎がそこに散りばめられている。行動、言動にはそれぞれ絶対意味がある。

0 話 紹介（前書き）

小説なんて全然読みません。だから文なんて分かりませんがよろしくお願いします。

0 話 紹介

俺の友達は、もてる。とにかくもてる。

運動ができて勉強ができて顔もいいし性格もいい。

対して俺は、運動はそこそこ、顔もいたって平凡、性格は最悪、取り柄があるとしたら頭脳とある特技だろう。

友達の名前はヒカル。

光と書いてヒカルと読む。

ヒカルは今まで挫折を知らない人生を送ってきた。

俺の名前はカイ。

解と書いてカイと読む。

俺は今まで挫折だらけで裏切りだらけで嘘に満ちたの人生を送ってきた。

これは物語とも言えない。

クソみたいなもの。

ただ単に俺が裏切られ、俺が騙したというだけ。

0 話 紹介（後書き）

読んで後悔なされても謝りません。

↑ふてぶてしくてすみません

1（前書き）

後悔しない事を願っています。

友達のヒカルは真面目。

俺は不真面目。

だから自然と授業の態度が変わってくる。

ヒカルは教室で先生の話を真面目に聞いている。

俺は普段は開かない屋上の鍵を開けて、サボっている。

タバコを吸いながら。

「何で皆はこれまずいって言うんだよ」

タバコの銘柄はラッキーストライク。

好きな人は好きで、嫌いな人は嫌い。

俺は多分依存しているんだと思う。

屋上から見えるグラウンドには3年1組の生徒がいる。

なぜ3年1組なのか分かったのは、秋口 瑞穂がいるから。

学校で一番優秀な生徒。

そして学校で一番美しい。

そういう評判だ。

屋上の扉が開く。

俺は来た人物が誰なのかわかる。

「いつも何でお前は屋上に来るんだよ、はつきり言っとうざいぞ」

「あなたはいつも他人に冷たいわね」

落着き払っている。

相手の名前は綾。

学校で3番目に優秀な人物。

いつも俺を気にかけるうざい奴。

ちなみに綾はヒカルが好き。

「何で力があるのに使おうとしないの？」

こいつはいつもこんな質問をする。

だけど俺の答えはいつも決まっている。

「俺の自由だろ」

嘘じゃない。

決して嘘じゃない。

綾は、ため息をついて俺の横に座る。

「うざい」

本当にうざいのだ。

こいつはヒカルが好きなくせに俺を異常なまでに気にかける。

もしかしたら俺を通じて、ヒカルの好感度アップを狙っているのかもしれない。

「授業あんだろ、戻れよ」

「あなたにだけは言われたくないわ」

綾は呆れ顔。

そりゃそうだ。

「うるさい、ヒカルに嫌われるぞ」

「そんな事であの人は嫌わないわ」

そんな事分かってる。

恐らく俺が一番ヒカルを分かってるのだから。

あいつの親よりも、あいつを好きな奴よりも、あいつの友達より。

「それとタバコは止めなさい」

これも毎回言ってくる。

もちろん止めるつもりは無いのに。

「嫌だ。俺がこれを止める時は俺が死ぬまで来ない」
当然。

「それはあなたにとってそんなに大切な物だとも思わないけど？あなたの一番大切な物はあなたの腰に差してある刀でしょ？」

「当たり前だよ」

その時チャームになる。

なんだかんだ言ってもこいつとは気が合う。

うざいけどいつも最後まで喋ってしまふ。

こいつはヒカルを好きな奴の1人。

1（後書き）

進みません。物語は進みません。まだです。

2（前書き）

まだまだですね。勉強したいと思います。っていうか勉強って小説を読めばいいのかなあ？

俺はいつものように昼休みになつたら食堂へ行く。
…おまけつきで。

「ついてくんな」

ヒカル。

着いてきている人物はヒカル。
その周りには三人の女がいる。
めんどくさい…。

「何でカイはそんなに冷たいのかなあ」

「それが俺だ」

「そうですね。ヒカルさん、こんな人はほっておいて行きましょう」
さりげなく俺をけなした奴は、水灯 リサ。

人形のような綺麗な容姿。俺は黒髪が好きだから結構タイプだ。
だがこいつはプライドが高い。

それに優秀だ。

だから俺のような落ちこぼれが嫌いなのだろう。

それにヒカルは俺の周りをうるちよろしてるから、リサ的には俺は
邪魔。

「黙れ。まあ、そいつの言う通りだな。ついてくんな。うっとおし
い」

「カイ…」

俺は今日も友達に冷たくする。

何であいつは俺につきまとうのか分からない。

綾だってそうだ。

しかもヒカルは俺の力の一部を見たのに、ありえない。

「そういう言い方は無いんじゃない？」

綾が言う。

俺的には黙っていればいいのに。

俺が思うにこいつは瑞穂よりも美しい。

うざくなかったら最高なのに…。

「知るか。うざいんだよ、お前ら早く俺の前から消えろ」

「言いすぎよ。ねえ、みくさん？」

「え？まあ、ちょっと言いすぎだと思いますけど…」

みく。

雷灯 みく。

可愛い容姿で少し天然の茶色が入った髪の毛。

性格も大人しい。

心のオアシスだ。

けど今回は違う。

「お前らがどう思おうと俺には関係ない」

「カイ…僕達友達だよね？」

ヒカルは不安そうに言う。普段はこんなんだが、学校で一番目に優秀。

それに戦闘になったら強い。

「…当たり前だろ」

何を今更。

「そうだよな！僕達友達だよな！うん！じゃ行こっか！」

眩しすぎるくらいの笑顔でヒカルが言う。

リサはかなり不満そうに、綾は嬉しそうに、みくは不安そうにしている。

こうして俺は友達とその取り巻きとで食堂に目指す。

俺はヒカルの太陽のような笑顔に弱い。

出会ってしまった。

というより再会してしまった。

葉灯 光香。

俺の実の妹。

葉灯、水灯、雷灯、炎灯、空灯。

この5つの名字は、五大貴族なんて呼ばれている。

俺の名前は鬼灯 解。

この名前はある人に授けられたもの。

俺は葉灯を追い出された。致命的な魔力の欠如。

それが俺の欠陥。

家から不良品と見なされて、15の頃に家を追い出された。

それまでも色々あったが追い出された時に誓った。

絶対に復讐してやる。

俺の誓いはまだ続いているから、ここで光香に会ったのは絶好の好機。

だがまだ手は出さない。

そこまでバカじゃあないし。

光香は学校のバカ共、しかも先輩に絡まれていた。

そこをヒカルが助けてしまった。

幸い俺はある程度顔を変えているからバレてない。

そして光香もヒカルに惚れてしまった。

それは俺にとっては不幸以外何でもない。

この殺意を押し殺して。

俺はヒカルの元を去らなければいけない。
凄く不愉快だ。

「助けてくれてありがとうございます」

妹は綺麗になつていた。

俺はあの綺麗な金髪が嫌い。
昔も今も。

「いやいや、いいんだよ。ねえ？カイ？」

「良くねえ。うつとおしいのがまた増えるじゃねえか」

「そんな事言っちゃだめだよ」

ヒカルは笑う。

だが今の俺にとっては不愉快。

いつそこで殺してしまおうか。
皆殺しだ。

そんな気持ちを押し殺して俺は今日も逃げる。
抜きかけた刀は少し残念そうに見える。

「食堂」

俺は一言で済ます。

「ああ、今度こそ行こうか」

斬りたい。

斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい斬りたい
その首を今すぐはねてしまいたい。
殺してしまいたい。

そうすれば俺は楽になれるだろうか。

毎日殺意、憎悪に身を焼かれる生活から解放されるだろうか。

…まだ、まだだめだ。

この感情は俺にとって生きる糧だから。

俺達は食堂へ行く。

3 (後書き)

ぐっだぐだでしたね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8714d/>

欺瞞に満ちた世界

2010年10月10日02時52分発行